

博士学位論文要旨

松谷みよ子論

——児童文学・民話・自伝・小説・評論におけるジャンル混淆と女性表象——

城西国際大学大学院人文科学研究科比較文化専攻

和佐田道子

本論文でとりあげる作家松谷みよ子(1926-2015)は、現在、日本を代表する児童文学作家として位置づけられている。が、それだけにはとどまらず、民話の採集と再話、自伝、小説、評論等と、幅広い文学ジャンルにわたって執筆をおこなった、ジャンル混淆の作家でもある。

本論は、これまで、単に児童文学作家として、主に児童文学の領域で評価されてきた松谷みよ子について、ジャンル横断、ジャンル混淆、ジャンル超越という現代の問題の視座から、新たな松谷みよ子像を提示するものである。

松谷がジャンル横断の表現者である、ということは、その著作の中身を一見すれば明らかになる。2015年に没するまで、その89年の生涯において、20歳から書き始め、69年間の執筆期間のあいだ、出版された本は570冊余り。その内訳は、赤ちゃんむけ絵本から、幼年向けの童話、小中学生向けの児童文学、民話の再話と民話研究、大人向けの小説、自伝と自伝的小説、舞台台本、評論やエッセイまで、実に多彩な文学ジャンルを含有した膨大な作品群を、幅広い年齢層にむけて書き続けた。

作家としての出発は、児童文学の童話だったが、その後、それまで日本の出版界には存在しなかった「赤ちゃんむけ」の絵本を企画し、苦心して開発に勤しみ、自ら執筆して出版し、以前は無かった乳幼児むけの絵本を、日本で初めて世に送り出した。松谷が独自に赤ちゃんむけの文学を創出し、新たな文学ジャンルを創設した先駆者としての意義は大きい。

じじつ、0歳児むけのこの絵本『いない ない ばあ』は累計発行部数569万部以上のロングセラーの記録を更新中であり、日本の子どもたちは乳児から就学前の時期には、松谷の幼児むけ絵本で、就学後の時代には、小学校で使う国語科の教科書をはじめ、「モモちゃん」シリーズなど、数多くの童話、児童文学で松谷の作品世界に触れている。そのため、松谷の名前は、日本の子どもたちのほとんどが知っている、と言えるだろう。

また、児童文学作家として知られる松谷だが、赤ちゃん絵本や幼年文学といった分野だけではなく、全国の民話を採集し、再話する仕事を生涯にわたって続けた。松谷は、各地方に伝わる民話を「祖先からのおくりものである」という自らの信条に立脚し、伝承されてきた民話の活字化に努め、民話研究者として、その成果を夥しい数の書籍化の実現へと尽力した。それは有名な『龍の子太郎』のように、民話を独自に再話、再創造した絵本をはじめとする児童文学だけではなく、民話の研究会を主宰し、口承されてきた民話の保存活動や、各地に伝わる民話の採集と再話、研究書の出版の仕事へも繋がっている。

民話の採集で培った多様な視点が、児童文学や民話、小説などのモチーフとしてジャン

ルを超えて自作に活かされ、その想像力溢れる独自の発想は、表現の面で豊かに発展し、後の目から鑑みれば、先駆者として、文学や映画、アニメなど、様々な作り手の世界に与えた影響も看過できない。このように、松谷みよ子という人は、一人で形成したものとしてはあまりにも深い、広大なスケールの文学世界を持ち、文学におけるイノベーションという、無から有を生み出す発想に抜きん出ていただけでなく、書き手として独自性に富み、真の創造性を作品に発揮した作家である。

さらに、児童文学と民話の領域だけにとどまらず、幅広い読者層へ向けて、YA(ヤングアダルト)文学や大人むけの小説も執筆し、多様なジャンル混淆をはかりながら、独創的かつ旺盛な創作活動を続けた。そのなかでも、松谷自身の精神性という意味で欠かせない側面は、軍国乙女として太平洋戦争中、辛苦を舐めた戦争体験者としての立場から、平和運動に熱心であったことである。連作〈直樹とゆう子の物語〉の5作品『ふたりのイーダ』『死の国からのバトン』『私のアンネ=フランク』『屋根裏部屋の秘密』『あの世からの火』に、原爆と公害の被害者からの告発、戦争加害者側の意識よりアウシュビッツ、七三一部隊、満州からの引き揚げ体験を描き出すことで、戦争と民衆についての問題意識を、自著の作品を通じて丹念に掘り下げ続けたことが特徴である。

松谷の生涯を賭けて追及された民衆と戦争というテーマは、決して、過去についての思索というだけのものではなく、『現代民話考』というかたちで、ときに現代に生きる私たちと一緒に考えられ、民俗学的な見地と、伝承されてきた昔話伝説民話と、現代の私たちに今起こっている現実をも照射する、普遍的な鳥瞰図的な視線で現代社会の課題を浮き彫りにし、その問題点を端的に見通す視点も備えていた。

それは、松谷が10歳の時に父が急死した経験やその後の戦争、19世紀のアメリカの作家エドガー・アラン・ポー、岡本かの子の著作などの影響から、自身があの世界とこの世界の境、死者が近くにいるような独自の世界観を生涯持ち続けたことにある。

この異界への、松谷独自の感覚は、明日の命も知れない、過酷な太平洋戦争の空襲下を生き延びた経験が大きく影響している。また、各地で、長い間口承されてきた話に触れるうち、民話の中に埋もれて来た女性像を掬い取りたい気持ちが起点となって、マイノリティーとして埋没されてきた女性を主人公にした『つつじのむすめ』や『おしになった娘』という作品へも結実したといえる。このように、虐げられた人々、弱者への視線を失わずにたえず持ち続け、その困難を越えて行く先に希望を見つけようと、物語を書き続けた松谷の作品は、こんにちでも、非常に示唆的なものである。

だが、現代日本女性作家研究の領域では、松谷が取り上げられることは少なかった、といえる。それは、松谷が児童文学作家として、または、民話の研究者として、児童文学研究や民話研究などといった、特定の研究領域の中で限定されたまま、論じられてきたからであった。しかし、松谷は、1960年代70年代の、フェミニズムが立ち上がってくるなかで、女性としての自分と、女性としての生き方を確実に、思惟的にとらえ続けていたことは間違いない。

本論文では、まず、このような松谷みよ子の文学のテキストをフェミニズム批評の方法で

読み直すことで、新たなフェミニズム文学として再評価する大きな可能性があると考えた。具体的に、本論で新たに、松谷みよ子がこれまで論じられてこなかった、フェミニズムとフェミニズム文学批評の視座で、女性文学としての松谷みよ子の作品を分析し、また、松谷みよ子という作家を生み出し、育んだ先人の作家と作品について、その読書歴から、松谷文学の礎となった源流を探り、さらに、これまではほとんどその視座を用いて研究されることがなかった、松谷の生涯のわたるテーマの一つ「死者との出会い」「死者との対話」というパースペクティブから、米国の作家ポーの影響をはじめ、児童文学に描いた「死」と「死神」や戦争体験、小説に発展した、その独自の「死生観」を考察するものである。

全体の構成は、全三章であり、これまで、児童文学や民話の領域を中心に研究されてきた松谷の文学を、新たな視点で、フェミニズムとフェミニズム批評の視座から論考した「第1章 松谷みよ子が掬い上げた女性像」。松谷を形成した文学を、アンデルセンや鈴木三重吉、岡本かの子、父與二郎の作品から探り、のちの松谷をかたちづくった文学観を分析した「第2章 松谷みよ子を形成した文学」。民話を採集する上でも、児童文学や大人向けの文学を書く上でも、松谷の心を生涯捉えて離さなかった「死」について、能や法華経、口承の言伝えの影響など、松谷自身が行き着いた「死生観」について、ポーの影響や自身の連作に書き継いだ戦争体験を伝える児童文学作品と、聞き書きをまとめた大人向けの小説についての論考を展開した「第3章 松谷みよ子文学における「死生観」となっている。

第1章では、松谷みよ子が作家として活躍する同時代に進展したフェミニズムと松谷の文学と思想の関係を分析し、松谷がそれまでの、柳田國男など男性中心の民話の語りから、抜け落ちていた女性像を掬い取り、自身の文学の中に再話として活字として残したように、執筆当時は働きながら子育てをする女性が少ない中で、働く母の姿を描くだけでなく、児童文学ではタブーとされた離婚を描くなど、十分にフェミニズム的な作家であったにもかかわらず、それは松谷独自の「静かなるフェミニズム」に収斂、昇華されていると結論づけた。

第2章では、松谷の読書歴を丹念に辿り、幼少期の児童むけ全集の読書から、アンデルセン、鈴木三重吉を経由し、坪田譲治、父與二郎のユートピア未来小説、岡本かの子からの小説の影響を分析し、後に作家松谷みよ子を形成する文学の礎、源流となったものを抽出した。

第3章では、松谷文学を通底するテーマ「死生観」を取り上げ、ポーの作品から想起された「灰色の死」をはじめ、喋る猫と鴉をめぐる「死」のメタファー、デビュー作からその後の作品に繰り返し描かれた「死」と、原爆と公害、戦争の加害責任をテーマした連作における「死」。聞き書きで集めた「死者との対話」について、それこそジャンル混濁的な論考を試みたものである。

以上のような考察を経ることによって、本論では、これまで、個々の作品論程度でしか、取り上げられることのなかった松谷みよ子の文学世界の全貌が明らかになるように努めた。

さらに、児童文学や民話という、各々の研究領域のなかでとどまって論じられていた松谷を、女性文学研究のテーブルの上に乗せ、フェミニズム思想、フェミニズム批評の視座から、新たに論考を加えたこと、その文学の出発点と形成過程を辿ったこと、「死」という切り口

から改めてその文学世界を再考したことには深い意義があった。

松谷自身が先駆けてジャンル混淆の作家であったように、松谷みよ子論と題する本研究も、松谷の作品世界、その文学の全貌を明らかにするため、松谷独自のジャンル混淆という視座から捉え直し、同時に女性表象という視点から改めて考えることで、新たに、包括的な松谷みよ子像を立ち上げ、新しい松谷みよ子論の提示の実現を試みたものである。